

明治記念大磯邸園 基本計画（案）

【 資料編 】

目 次

1 .立地.....	1
2 .邸宅及び庭園の現況.....	2
3 .邸園に積層する歴史.....	22
4 .明治期の景観・地形.....	25
5 .本邸園の現況植生	26

1. 立地

計画地のある大磯町は、神奈川県南部に位置し、高麗山、鷹取山等の山並みや、こゆるぎの浜等の海に象徴される豊かな自然を有しています。

計画地周辺では、海岸沿いに植林されたクロマツ林が浜辺とともに県内有数の白砂青松の景観を形成しています。

山地の前面にはなだらかな丘陵が広がり、その南には、大磯町の中心をなす市街地が広がり、東海道（国道1号）、小田原厚木道路やJR 東海道本線等の交通路が通り、東海道（国道1号）のバイパスとして、西湘バイパスが整備されています。

本邸園は、北側が東海道（国道1号）に接しており、南側は太平洋岸自転車道と西湘バイパスに面しています。良好な自然環境を有し、風致地区や特別緑地保全地区に指定されています。また、歴史的建造物を活かした観光推進を図るため、特別用途地区に指定されています。



図1 大磯町の位置と全景

出典：大磯町景観計画（邸園位置加筆）

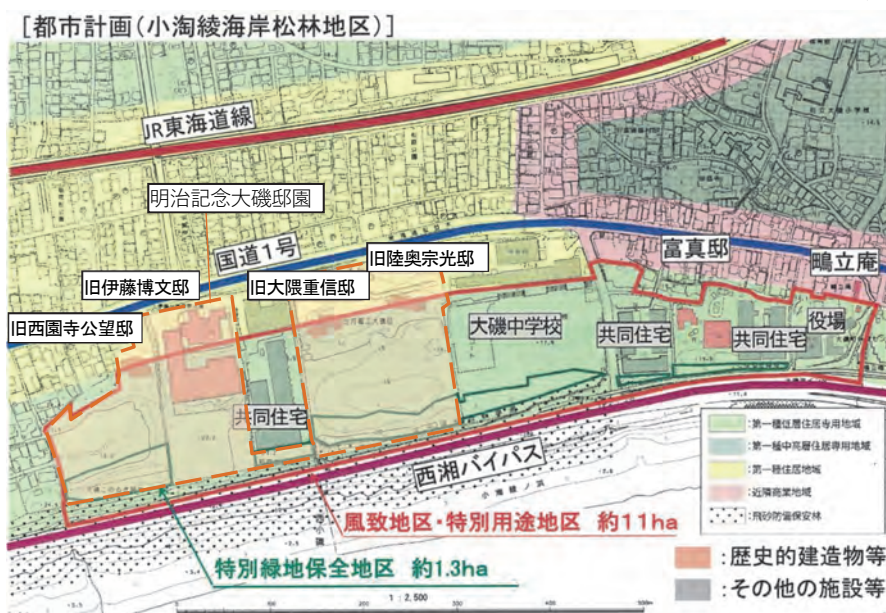


図2 周辺の地域地区の指定状況

出典：大磯町都市計画図（邸園位置加筆）

2. 邸宅及び庭園の現況

本邸園内に現存する邸宅と庭園の現況は以下のとおりです。

(1) 旧滄浪閣（伊藤博文邸跡・旧李王家別邸）

旧伊藤博文邸は滄浪閣と呼ばれ、初代内閣総理大臣である伊藤博文が明治 29 年(1896)に建てた別邸を翌年(1897)本邸としたものです。伊藤の没後は李王家(李垠)に譲渡され、李王家別邸として使用されていましたが、大正 12 年(1923)の関東大震災により倒壊し、その後建て直されました。第二次世界大戦後、民間企業により増改築がなされていますが、今日、李王家別邸の姿が残されています。

以上を踏まえ、「旧滄浪閣（伊藤博文邸跡・旧李王家別邸）」として表記します（以降、「旧滄浪閣」という）。

「滄浪閣」の由来

中国古代の詩集「楚辞」にあるとされ、青々とした波（滄浪）が綺麗なときは冠の紐を洗い、濁っているときは足を洗うという意味から、何事も自然の成り行きに任せて身を処するとの意味を表している。

1) 立憲政治の確立等に貢献した人物

伊藤博文 生没年：天保 12 年(1841)－明治 42 年(1909) 出身地：山口県



写真 1 伊藤博文
(国立国会図書館所蔵)

明治 18 年(1885)に初代総理大臣に就任しました。
内閣制度の創設(明治 18 年)、明治憲法の起草(明治 20 年)をはじめ、立憲政治の黎明期に大きな役割を果たしました。

2) 諸元

項目	前身邸宅	現存邸宅
敷地規模	約 5,500 m ² (約 1663 坪)	約 17,280 m ² (約 5,230 坪)
延床面積	主屋(和風): 約 287 m ² (87 坪) 主屋(洋風): 約 231 m ² (70 坪)	1,254 m ² (旧李王家別邸及び増築部分) 4,572 m ² (商業施設)
建築年	明治 29 年(1896)	旧李王家別邸: 大正 15 年(昭和元年)(1926) 商業施設: 平成 4-7 年(1992-1995)
構造	主屋(和風): 木造平家建 茅葺 主屋(洋風): レンガ造 2 階建 瓦葺	旧李王家別邸: 木造平屋建 鉄板葺一部瓦葺 商業施設: S 造一部 RC 造 銅板葺
設計者	不詳	旧李王家別邸: 中村與資平(監修: 宮内庁内匠寮)
施工者	不詳	旧李王家別邸: 多田工務店
その他	－	一部(李王家別邸部分)が大磯町指定有形文化財

3) 邸宅の特徴

● 前身邸宅（伊藤博文邸）

明治 30 年（1897）の「家屋図」によれば、茅葺の和館 2 棟と洋館 1 棟、執事棟、長屋棟、井戸屋・物置・浴室棟の計 6 棟が建てられていました。明治末期から大正初期の古写真からは、その後、洋館が増築されたと推定されます。

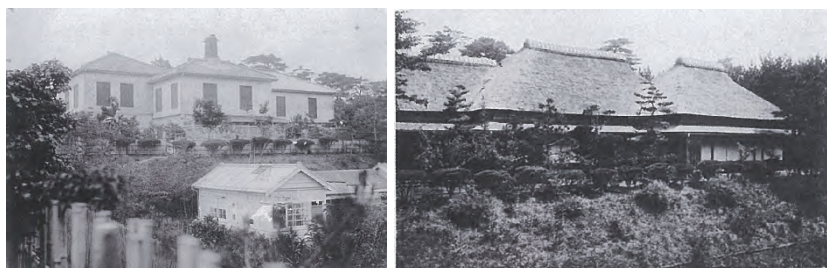


写真 2 明治期の伊藤博文邸（左：洋館 右：和館）

出典：大磯町郷土資料館『滄浪閣の時代：伊藤博文没後 100 年記念展』図録 2009

洋館は伊藤の居間、書斎、来賓の応接室、接待室等の公的な機能で、和館は主に居宅として、伊藤博文の母琴子や妻梅子が起居していました。「楼上」（場所は不明）からは富士山を望むことができたと言われています。

門は黒塗りで、長屋は 2～3 軒続き、武者窓が付いていたと思われます。

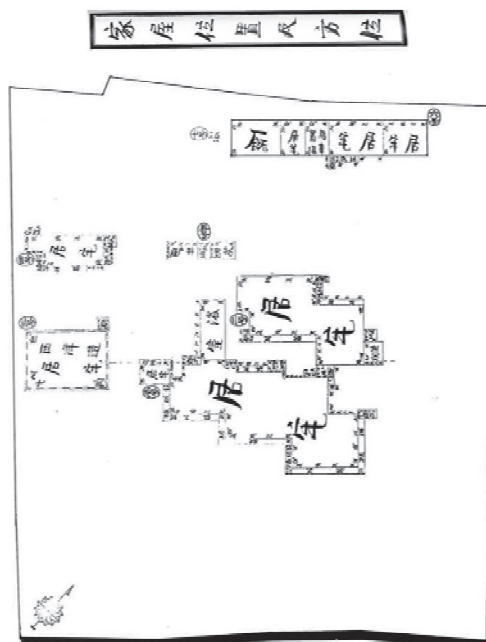


図 3 大磯町行政資料 伊藤博文本邸「家屋図」（明治 30 年初頭）（大磯町立図書館所蔵）

● 現存邸宅（李王家別邸）

大正 12 年（1923）関東大震災により伊藤博文邸の滄浪閣は倒壊し、大正 15 年（昭和元年）（1926）に当時の所有者である李王家の別邸が再建されました。その際、旧材を一部使用したと言われています。

李王家別邸の改築平面図（図 11）によれば、南側の洋室棟と和室棟を中心に洋室棟の北側には中庭を挟んで玄関・事務室棟と調理・配膳棟が続き、和室棟には棟続きで侍女棟が配置されていました。

部屋名から、玄関棟の東側部分と洋室棟の御客間・御居間はパブリックな空間として、洋室棟のその他の部屋と和室棟はプライベートな空間として使用されていたものと推定

されます。バックヤードは2種類みられ、1つは玄関・事務室棟の西側部分で事務方のバックヤードとして、1つは侍女棟で生活方のバックヤードとして機能していたと考えられます。このようなパブリック・プライベート・サービス（バックヤード）のゾーニングや動線は格式が高く、王公族の別邸の貴重な事例と考えられます。（図12）



図4 大磯滄浪閣御別邸改築平面図（東京都立中央図書館木子文庫蔵）

また、和室棟には、明治天皇から下賜された皇室の御用絵師・湯川松堂^{ゆかわしょうどう}による杉戸絵が建て込まれていたと伝わっています。（現在は大磯町郷土資料館所蔵）



写真3 明治天皇から下賜された杉戸（部分）

（大磯町郷土資料館提供）

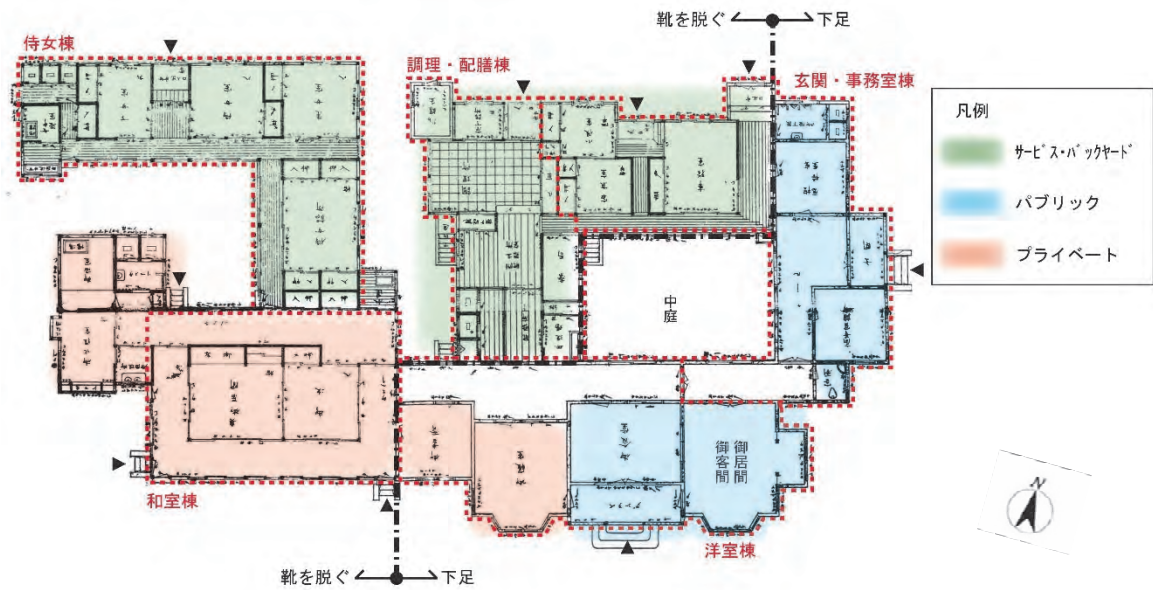


図5 旧滄浪閣（伊藤博文邸跡・旧李王家別邸）の特徴

大磯滄浪閣御別邸改築平面図（東京都立中央図書館木子文庫蔵）を元に作成

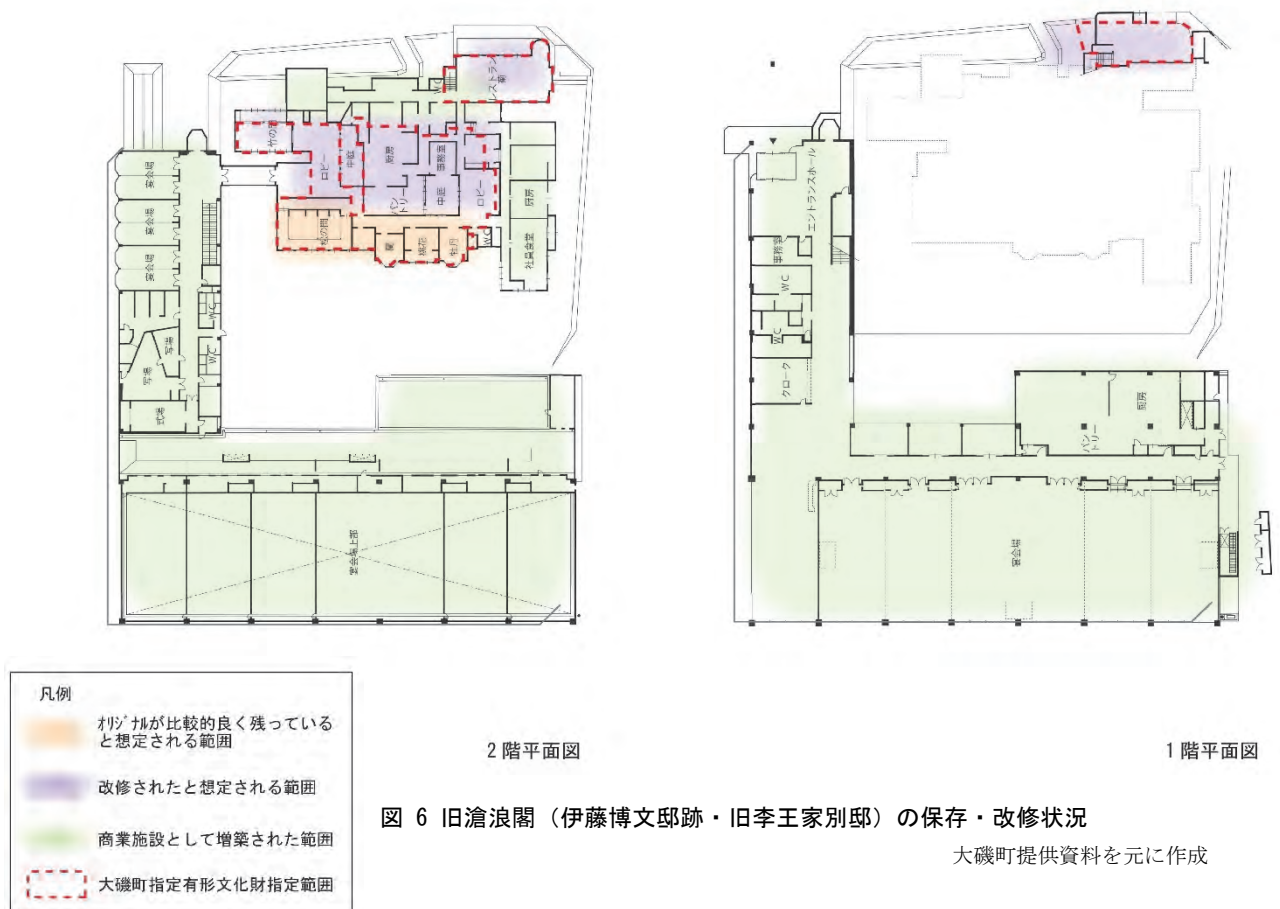


図6 旧滄浪閣（伊藤博文邸跡・旧李王家別邸）の保存・改修状況

大磯町提供資料を元に作成

● 現状

第二次世界大戦後、商業施設として利用されるにあたって、度重なる増改築が行われましたが、現在は李王家別邸の邸宅を囲むようにチャペルや、宴会場として使用するため作られた RC 造の建物（図 13 の商業施設として増築された範囲）が増築されています。

邸宅内部は間仕切りや仕上げ材等は改変が見られるものの、南側の和室棟・洋室棟を中心に大正期のモダニズムの雰囲気を良く留めている別荘地大磯の代表的建築として、平成 20 年（2008）には大磯町有形文化財に指定されています。



写真 4 洋室棟南側外観 (2018 年 10 月撮影)



写真 5 商業施設外観 (2018 年 9 月撮影)

4) 庭園の特徴

邸宅周りは庭木が数本仕立てられた簡素な造りで、伊藤邸の主たる庭園は邸宅よりも一段低い位置にありました。庭園には熱心な園芸家であった梅子夫人の温室が設けられ、国内外の珍しい植物を栽培していたと言われていました。古写真からも、庭園が爛漫の花畑になっている様子が伺えます。(写真 6)

また、一面には、伊藤が尊敬する四名（木戸孝允、大久保利通、岩倉具視、三条実美）が祀られた「四賢堂」が建てられ、周囲は梅の木で囲われていました。(写真 6 奥)

これら庭園の四賢堂や温室は、古写真等の資料のから、邸宅の完成後しばらくして建てられたと推定されます。



写真 6 滄浪閣前庭にて (伊藤邸の庭 (明治末期))

出典：大磯町郷土資料館『滄浪閣の時代：伊藤博文没後 100 年記念展』 2009

また、場所は明らかでないものの、伊藤が孫と釣りをしたり、地元の子どもたちが滄浪閣に忍び込んで鯉を釣ったりした池が庭にあったという記述が残っています。

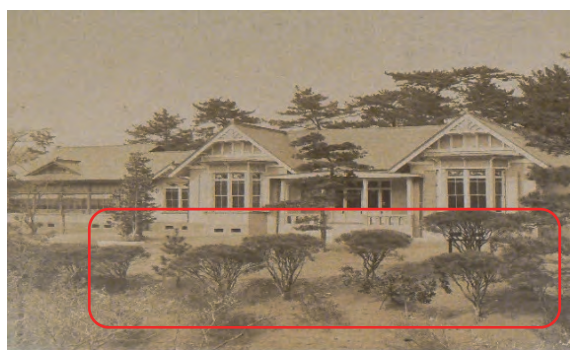
現在、旧李王家別邸の南側にある前庭は、石畳の通路がある芝庭になっており、松や桜等の高木が点在しています。

また、中庭に残された景石と^{つくばい}蹲、和室棟前の雪見灯籠等の中には、歴史を感じさせる物もいくつか確認され、斜面との境にあるタギョウショウは伊藤邸の時代に植栽されたものと考えられます。



伊藤博文邸 洋館（明治期）

出典：大磯町郷土資料館『滄浪閣の時代：
伊藤博文没後 100 年記念展』 2009



李王家別邸（撮影年代不明）（大磯町郷土資料館提供）



現在（2019 年 1 月撮影）

写真 7 タギョウショウの列植

しかし、その他の部分は大規模に改修されており、かつて梅子夫人の温室や四賢堂があったと考えられる位置には商業施設の建物と池が造られ、海側にあった松林も駐車場として整備されていることから、邸宅として利用されていた往時の庭の形跡はほとんど残っていません。



写真 8 和室棟前の雪見灯籠（2019 年 1 月撮影）



写真 9 海側につくられた駐車場（2018 年 8 月撮影）

(2) 旧大隈重信別邸・旧古河別邸

旧大隈重信邸は、大隈重信が明治 30 年（1897）に大磯に購入した邸宅で、一部増改築がなされているものの、ほぼ往時の姿を留めています。

明治 34 年（1901）に古河市兵衛（古河財閥創業者）に売却されたことから、その後は古河別邸や民間企業の迎賓施設として維持管理が続けられてきました。

以上を踏まえ、「旧大隈重信別邸・旧古河別邸」と表記します（以降、「旧大隈別邸」という）。

1) 立憲政治の確立等に貢献した人物

大隈重信 生没年：1838 年（天保 9 年）－1922 年（大正 11 年） 出身地：佐賀県



写真 10 大隈重信
（国立国会図書館所蔵）

明治 18 年(1885)に第 1 次伊藤内閣の外務大臣を務めた後、明治 31 年(1898)に憲政党を結成し、総理大臣として日本初の政党内閣を組織しました。

また、早稲田大学の前身となる東京専門学校の創立者（明治 15 年創立）として、教育にも尽力しました。

2) 諸元

項目	現存邸宅
敷地規模	約 8,000 坪（陸奥宗光別邸跡・旧古河別邸の敷地共）
建築面積	約 363 m ² （110 坪）
所 有 年	明治 30 年（1897）
構 造	木造平屋建 寄棟金属板瓦棒葺（元々は寄棟草・瓦葺）
設 計 者	不詳
施 工 者	不詳

3) 邸宅の特徴

現存の邸宅は、既存の邸宅を大隈重信が購入したもので、明治 30 年代初頭の家屋図によれば、主屋は茅葺で、主屋南西隅には土蔵が付属していました。

家屋図以降に描かれた大隈重信所有時の平面図が残されていますが、家屋図と比べると、大隈重信の時代に台所と浴室が増築されたことが確認できます。

旧大隈別邸の主屋は、雁行型の平面で、東西に延びる廊下を軸にして、眺望のよい南側へ客室と私室を配置しています。玄関を入れて直ぐの位置にある 10 帖と 16 帖の和室は「富士の間」と呼ばれ、北側に台所が配された空間と合わせてバブリックな空間であった

と考えられます。「富士の間」では社交家の大隈によりよく宴が催されたと伝わっています。

一方、北側と東側の棟は、プライベートな空間だったと考えられます。特に東側の棟は大隈が書斎として使っていた9帖の和室があり、神代杉が使われていたことから「神代の間」と呼ばれていました。「神代の間」の床の間には爆破襲撃事件により、片足を失くした大隈の体に配慮して暖炉が設えられていたと伝わっています。

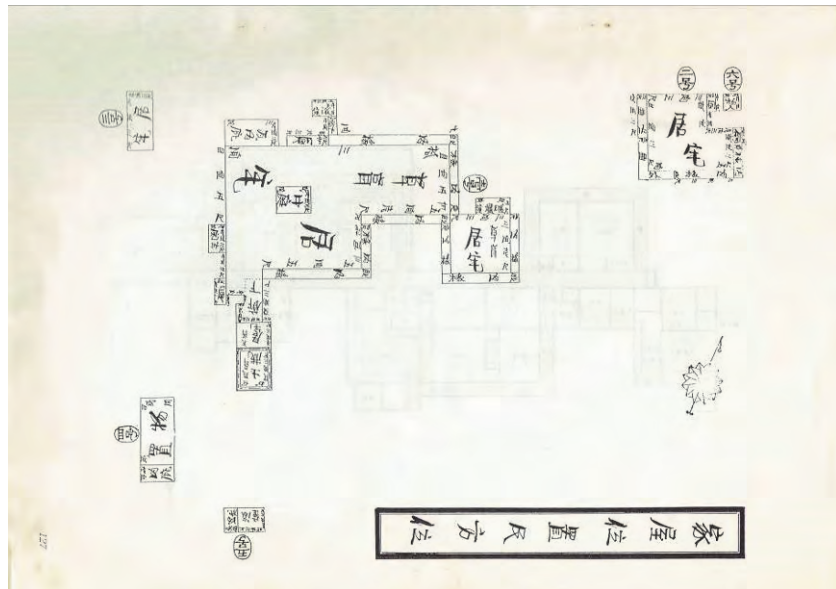


図7 大磯町行政資料 大隈重信別邸「家屋図」(明治30年初頭)

(大磯町立図書館所蔵)

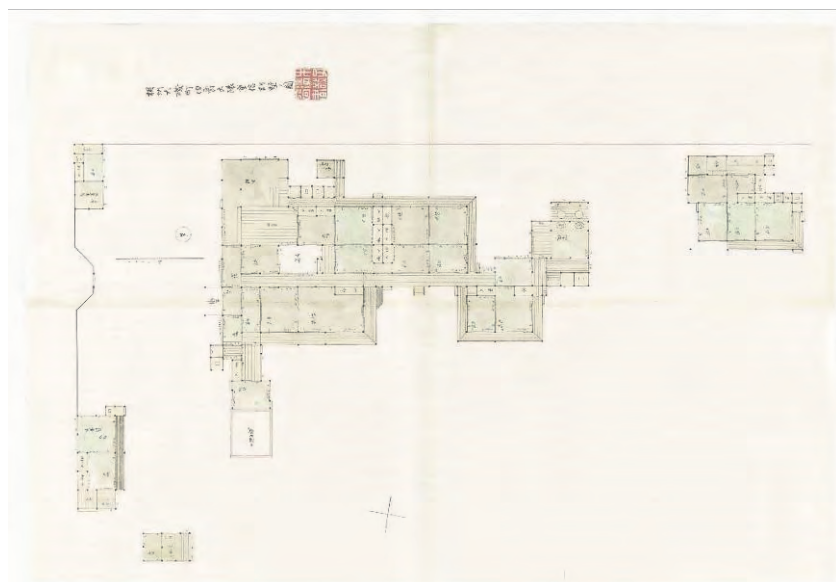


図8 相州大磯町伯爵大隈重信別墅ノ図(明治40年以前)

(東京都立中央図書館木子文庫蔵)

古河家へ引き渡された後は、水廻りの改変(減築)が行われ、昭和27年(1952)から39年(1964)の間に土蔵が現在の位置へと変わり(移築かどうかは不明)、屋根が茅葺か

ら金属板葺に改変されたと推定されます。また、近年、縁側の拡張も行われました。

以上のように、主屋は、一部改変が見られるものの、「神代の間」をはじめとする主要範囲は残されており、明治期に遡る大磯の別荘建築において、貴重な歴史的遺産です。

なお、主屋以外の建物は、時期は不明ですが、現在までに全て撤去されています。

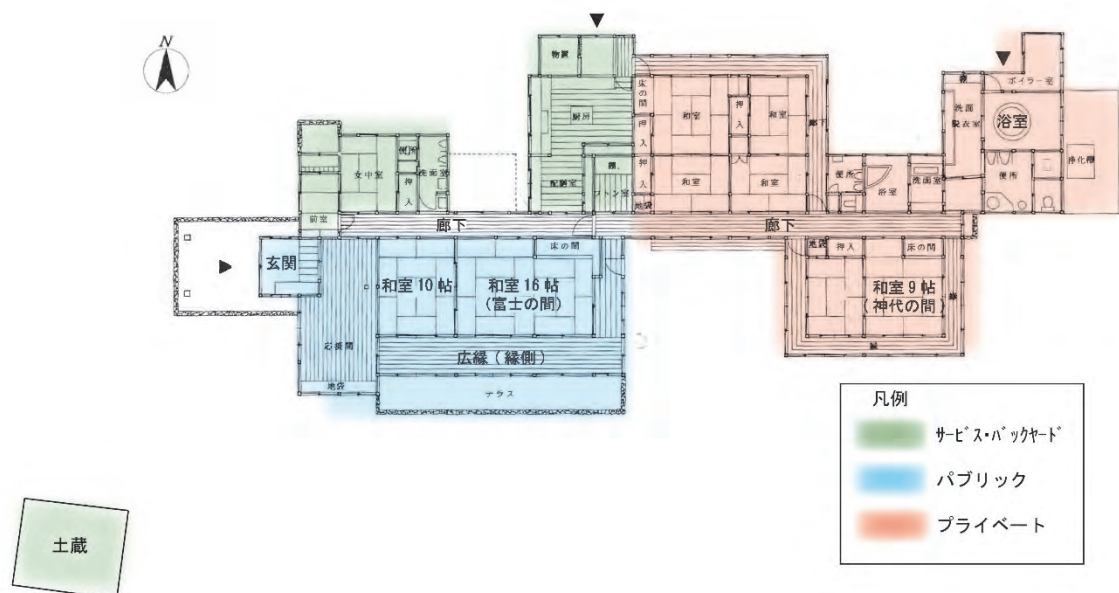


図 9 旧大隈重信別邸・旧古河別邸の特徴

(大磯町教育委員会『大磯のすまい』1992 を元に作成)



図 10 旧大隈重信別邸・旧古河別邸の保存・改修状況

(大磯町教育委員会『大磯のすまい』1992 を元に作成)



写真 11 富士の間（2018 年 9 月撮影）



写真 12 神代の間 外観（2018 年 9 月撮影）



写真 13 土蔵（2018 年 10 月撮影）

4) 庭園の特徴

大隈別邸時代の作庭部分が、どの程度残されているかは明らかではありません。陸奥別邸跡の邸宅とともに古河家によって引き継がれ、一つの敷地に整備されて、今日まで維持管理が継続されていたことを踏まえると、概ね古河別邸時代の庭が現存するものと考えられます。

現在、旧大隈別邸の前庭は、日本的な庭園手法と洋風庭園的な使われ方の双方が見られる和洋折衷式庭園の様相になっています。中庭には庭石、水鉢、^{みずばち}灯籠が配置され、南側には明るい芝生庭、その先に続く多段構成の斜面にツツジの群植があり、さらに下った場所にタギョウショウの列植が見られます。

多段式の斜面の形状から、これら植栽は、海沿いの松林や相模湾等を借景として取り込む構成であったと考えられます。

また、東海道（国道1号）側にある入口周辺には竹林やウメ、サクラ等が庭木として植えられています。



写真 14 多段構成の斜面 (2018 年 10 月撮影)



写真 15 タギョウショウ (2018 年 10 月撮影)



写真 16 水鉢 (2018 年 10 月撮影)



写真 17 灯籠（鷺型）(2018 年 10 月撮影)

(3) ^{むつむねみつ}陸奥宗光別邸跡・旧古河別邸

旧陸奥宗光邸は、陸奥宗光が明治 27 年（1894）12 月に、病氣療養のため大磯に建築した別邸でした。陸奥の没後、次男（^{じゅんきち}潤吉）の養子先である古河家の別邸となりましたが、その後、関東大震災で一部が大破したことから、古河家 3 代目当主の古河虎之助によって、原型の一部を残すように改築されたと言われており、改築後の邸宅が現存しています。

陸奥別邸跡・旧古河別邸は、旧大隈別邸とともに、古河別邸として使用された後、民間企業の迎賓施設として維持管理が続けられてきました。

以上を踏まえ、「陸奥宗光別邸跡・旧古河別邸」と表記します（以降、「陸奥別邸跡」という）。

1) 立憲政治の確立等に貢献した人物

陸奥宗光 生没年：1844 年（天保 15 年）－ 1897 年（明治 30 年）出身地：和歌山県



写真 18 陸奥宗光
（国立国会図書館所蔵）

陸奥宗光は、伊藤博文の勧めで、明治 17 年（1884）からの 2 年間、憲法を学ぶため、米国、英国、欧州に外遊しました。

第 2 次伊藤内閣（明治 25 年 8 月～29 年 8 月）の外務大臣に就任し、不平等条約である治外法権の撤廃を実現し、日本の国際社会における地位回復に貢献しました。

2) 諸元

項目	前身邸宅	現存邸宅
敷地規模	約 1682 m ² (509 坪)	約 8,000 坪 (旧大隈重信別邸・旧古河別邸の敷地共)
建築面積	約 317 m ² (96 坪)	約 363 m ² (約 110 坪)
建築年	明治 27 年 (1894)	大正 14 年 (1925)
構造	木造 草・瓦葺	木造 寄棟棧瓦葺
設計者	不詳	不詳
施工者	不詳	不詳

3) 邸宅の特徴

● 前身邸宅（陸奥宗光別邸）

陸奥宗光の別邸は、明治30年（1897）の家屋図によれば主屋は茅葺の邸宅で、その他に1棟の居宅、1棟の物置がありました。当時の邸宅が現在の敷地のどこに配置されていたかは不明ですが、邸宅の北側すぐのところに敷地境界があり、敷地北東隅に門が配置されていたことがわかります。

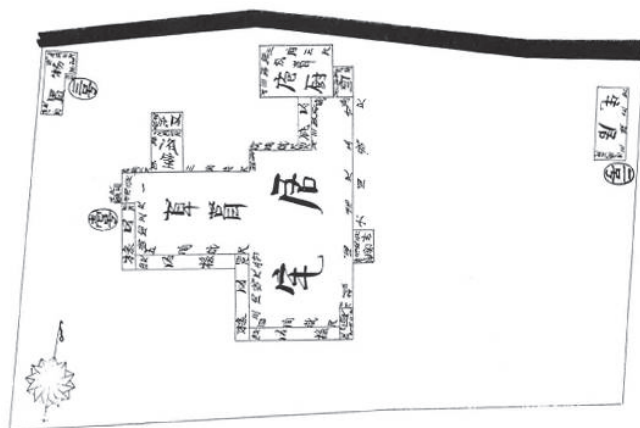


図11 大磯町行政資料 旧陸奥宗光別邸「家屋図」（明治30年初頭）

（大磯町立図書館所蔵）

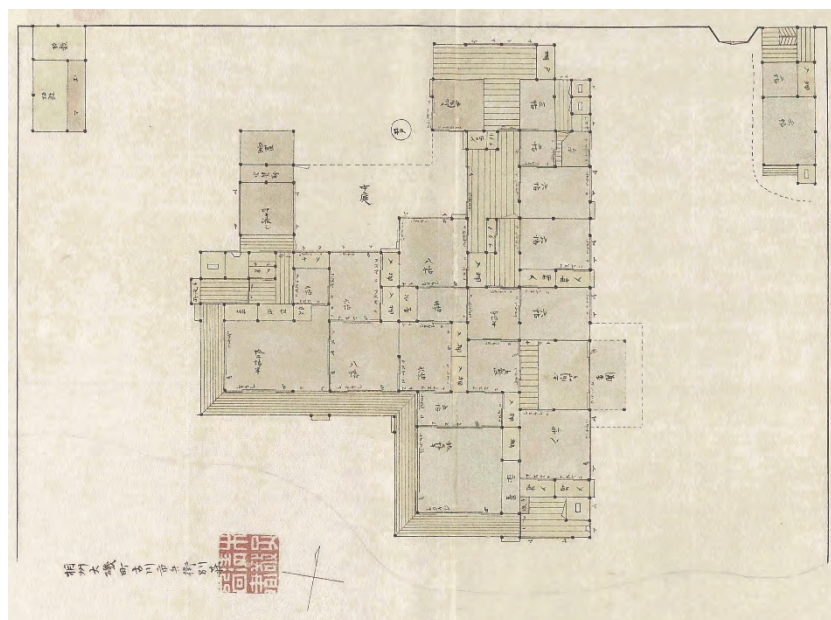
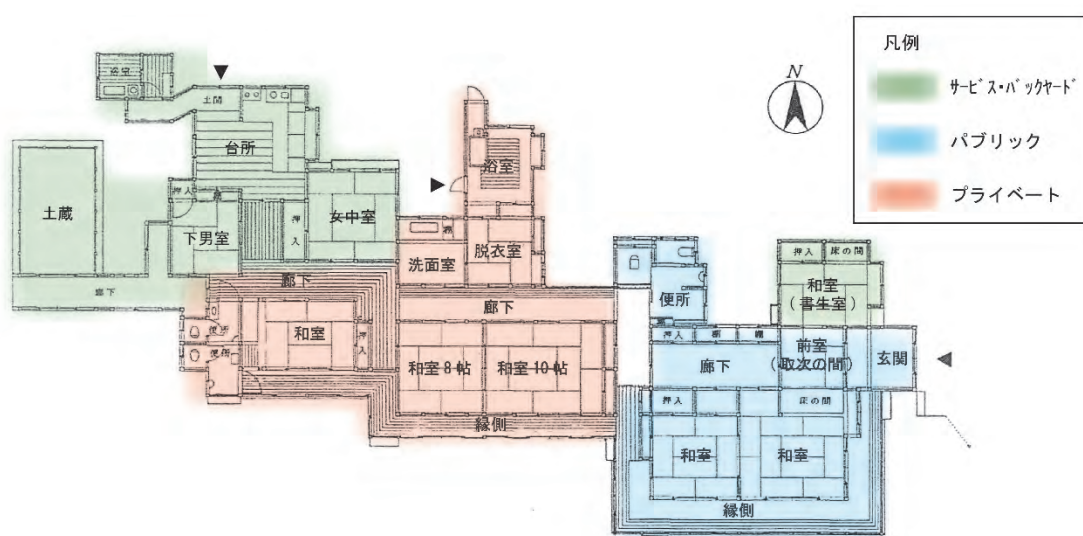


図12 相州大磯町古河市兵衛別荘（明治40年以前）

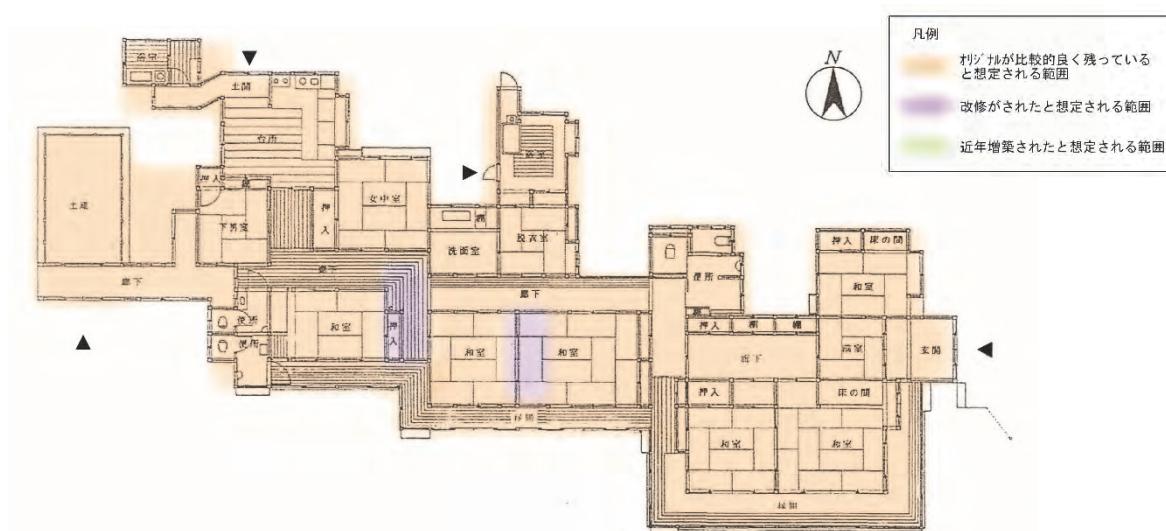
（東京都立中央図書館木子文庫蔵）

陸奥宗光別邸は、大正 12 年（1923）に関東大震災で一部が大破したことから、古河家によって原型の一部を残すように改築が行われ、現在の邸宅が建てられました。

縁側と廊下を分離することでサービス動線を明確にし、便所は客用・家族用・使用人用がそれぞれ設けられています。



(大磯町教育委員会『大磯のすまい』1992を元に作成)



(大磯町教育委員会『大磯のすまい』1992を元に作成)

大正13年（1924）の改築以後、土蔵が増築され一部開口部や壁の改変は見られるものの、保存状態が良く、当時の姿をよく留めています。なお、主屋以外の物置等は既に撤去されています。

また、玄関の東側には屋敷稲荷がありますが、祀られた年代は不明です。



写真 19 パブリックな空間となる和室2室（2018年9月撮影） 写真 20 外観（2018年10月撮影）



写真 21 屋敷稲荷（2019年1月撮影）

4）庭園の特徴

陸奥別邸跡に現存する前庭は、斜面地形を活かした滝石組のある日本庭園となっています。作庭年代は明らかになっておらず、現時点において、陸奥別邸時代の庭園の姿は分かっていません。

一方、古写真に明るく開けたマツの疎林の中で山縣有朋や家族とともに過ごす姿が残っており、往時の松林での憩いを垣間見ることができます。（写真 32）

邸宅前にある井戸からの流れに沿って、ツツジが植栽された斜面を下る回遊式庭園が主体となっています。斜面上段の井戸から出て滝からつづく流れは、庭園の点景となっている大型の雪見灯籠の横を抜け、池の跡と思われる窪地につながっています。滝石組は地域固有の石である根府川石と黒ボク石で構成される特徴的な意匠を有しています。

また、旧大隈別邸との共用部分とともに、庭園内には根府川石が、沓脱、飛石、畳石等

に使用されています。

作庭時は、海側の松林や相模湾等を借景として取り込む構成であったと考えられますが、植栽が生長し、線形が乱れ、当初作庭意図が感じられにくい状況になっています。

一時、古河家の夫人が居住していたこともあり、敷地の中には、バラ園や果樹園といった生活を感じさせる部分も残っています。また、バラの栽培では、バラ庭で有名な東京都北区にある旧古河庭園（古河家の邸宅）とのつながりを感じさせます。



写真 22 大磯の松林で憩う陸奥宗光
(撮影年代不明)



写真 23 陸奥邸前庭（2018 年 9 月撮影）



写真 24 雪見灯籠（2018 年 10 月撮影）



写真 25 滝石組（2018 年 10 月撮影）



写真 26 バラ園（2018 年 6 月撮影）

(4) 西園寺公望別邸跡・旧池田成彬邸

旧西園寺公望邸は、西園寺公望が明治32年(1899)伊藤博文の紹介で大磯に別邸を所有しました。滄浪閣の隣に位置することから「隣荘」と名づけられたと言われています。また、所在地の大磯が陶綾郡(陶綾郡)であったことから、西園寺の号と同じ「陶庵」とも呼ばれたとも言われています。

現在は、大正6年(1917)に別荘を譲り受けた池田成彬(大蔵大臣経験者)が、建築家中條精一郎に設計を依頼し、昭和7年(1932)に建築した洋館及び車庫が、ほぼ往時のまま残されています。

池田の没後は、民間企業の厚生施設として利用されていましたが、昭和50年代以降は利用実績がなく、敷地内は荒廃が進んでいます。

以上を踏まえ、「西園寺公望別邸跡・旧池田成彬邸」と表記します(以降、「西園寺別邸跡」という)。

※「隣荘」の呼び方には、「となりそう」、「りんそう」と諸説ありますが、本計画では「隣荘」と表記します。

1) 立憲政治の確立等に貢献した人物

西園寺公望 生没年：嘉永2年(1849)－昭和15年(1940) 出身地：京都府



写真 27 西園寺公望
(国立国会図書館蔵)

明治15年(1882)、伊藤博文の憲法調査に同行して渡欧し、伊藤が結成した立憲政友会の総裁も務めました。

明治時代に就任した最後の内閣総理大臣(明治44年8月～大正元年12月)であり、最後の元老として政界に大きな影響を与えました。

2) 諸元

項目	前身邸宅	現存邸宅
敷地規模	不詳	約 14,520 m ² (約 4,400 坪)
建築面積	不詳	約 815 m ² (約 247 坪)
所 有 年	不詳	昭和7年(1932)
構 造	木造 茅葺	R C造(一部木造) 寄棟瓦葺
設 計 者	不詳	中條精一郎(曾禰中條建築事務所)
施 工 者	不詳	竹中工務店

3) 邸宅の特徴

● 前身邸宅（西園寺公望別邸）

「隣荘」は規模や間取り、建物配置等の詳細はわかっていませんが、古写真からは2棟の茅葺の邸宅と複数の附属屋があったことが確認されます。



写真 28 隣荘 （撮影年代不明）

出典：大磯町教育委員会『大磯のすまい』1992

● 現存邸宅（池田成彬別邸のち本邸）

大正6年（1917）に池田成彬に引き継がれ、関東大震災で麻布本邸を焼失したのを機に、建築家の中條精一郎に設計を依頼し、昭和7年（1932）に現在の洋館を建築しました。



写真 29 池田邸 庭園側（撮影年代不明）



写真 30 池田邸 車寄（撮影年代不明）

出典：中條建築事務所『曾禰達蔵・中條精一郎建築事務所作品集』池田氏大磯別邸, 1939

邸宅は、北東に設けられた車寄から玄関を入ると1階中央に吹抜けの応接間があり、応接間から南東側に居間、書斎とパブリックな空間を連続させ、南側に食堂、温室（サンルーム）、北西側には厨房、女中室、客人の運転手や付き人のための休憩室等、サービス機能が集中しています。2階は、中央に共有スペースとなるギャラリーを配置し、東側を主寝室、西側を客室としています。各室とも浴室・トイレが付属しており、個室性の高い間取りで、主寝室からは海への眺望、客室からは海・山への眺望が確保されています。

また、チューダー朝英国風で、漆喰の壁に木のフレームが印象的なハーフティンバー様式の意匠を採用するなど、西洋的な造りから、内部は基本的に靴のまま利用していたと推定されます。

さらに、池田の要望により、地震に耐え得る構造とするため、コンクリートの厚さ4尺のベタ基礎が採用されました。また、地下にはボイラー室と石炭庫があり、1階にある投入口から石炭を入れ、各部屋の熱源を供給する暖房システムを供えていました。

なお、東海道（国道1号）側に、邸宅と同時期に建てられたと推定されるRC造のガレージ（地上2階）が現存しています。1階は車庫で南側は開放性があるつくりです。北側には便所と階段が設けられ、階段を上がると2階は和室となっています。



図 15 西園寺別邸跡・旧池田邸 平面図

(大磯町教育委員会『大磯のすまい』1992)

現在の邸宅は天井や壁の補修が見られ、老朽化が進んでいるものの、間取り等の改変はなく、竣工時の姿を良く留めており、往時の調度品や照明器具も残されています。ガレージも改変の痕跡がなく、保存状態が良いと考えられます。



写真 31 池田邸 居間 (撮影年代不明)



写真 32 池田邸 客間 (撮影年代不明)

出典：中條建築事務所『曾禰達蔵・中條精一郎建築事務所作品集』池田氏大磯別邸. 1939

4) 庭園の特徴

現存する池田成彬の邸宅は、設計した曾禰中條建築事務所の作品集に池田が住んでいた頃の邸宅の写真が掲載されています。これによれば、南側の前庭は、洋館中央に設けられたサンルームからつながる広い芝庭で、明るく開けた洋風庭園でした。また、北側の玄関にある車寄せの外壁はキヅタで覆われていました。細部までこだわり造られた洋館に合わせた洋風の植物が植栽されていたと推定されます

また、池田成彬は、大正8年(1919)、大磯に「池田農園」(後に日本園芸株と改名)を設立しました。様々な植物を栽培し、蘭の育種は1,000以上に上ると言われる近代的温室農園を造りました。

サンルームの中には、苗の移動用に用いる滑車が中央についており、当時は盛んに植物を栽培していたことが伺えます。

現在、玄関付近には、池田邸時代に植栽されたと思われるヒマラヤスギや外周壁を這うキヅタが繁茂しています。また、門扉や外周壁、敷地内に残る外灯等、池田邸が建築された際に造られたと考えられる構造物も見られます。

池田邸の佇まいは随所に残っていますが、西園寺邸の時代については、前庭から海沿いの砂丘まで広がる松林が子どもたちの遊び場だったという記録以外まだ明らかではありません。

注：1.邸宅及び庭園の現況は、今年度実施した文献調査及び現地概況調査から記載しています。今後、詳細調査により、異なる事実が確認される可能性があります。

3. 邸園に積層する歴史

明治以降、それぞれの邸宅に積層する歴史から、先人たちの交流の軌跡をたどることができます。時代の変遷ごとの主な出来事は以下のとおりです。

(1) 明治期

明治 27 年 (1894) に陸奥宗光が病氣療養のため、大磯に別荘を求め、元上司である山縣有朋の別荘 (現在の大磯中学校周辺) 近くに別邸を構えました。陸奥は伊藤内閣の外務大臣だったこともあり、大磯で療養する陸奥のもとを伊藤博文や陸奥の後任として外務大臣を務めた西園寺公望、陸奥の門下生だった原敬等の政治家が訪れたと言われています。また、明治 28 年 (1895) には伊藤博文が大磯に別荘を起工し、翌年「滄浪閣」が完成しますが、大磯の海辺の地を紹介したのは陸奥だったとも言われています。

伊藤博文は滄浪閣を本邸としたものの、多忙のため、わずかな休暇や病氣療養のために一時帰るだけでした。しかし、海辺や邸宅から見える富士山等の大磯の自然景観を気に入り、よく散歩をしていたことが知られています。また、気軽に町民に声をかけ、時には漁夫を招いて松林の中で宴会をしたり、道の整備や小学校の移転等に寄付を行ったりするなど、大磯町の人々やまちづくりに積極的に関わっていました。伊藤の尽力により造られた大磯駅から滄浪閣につながる道は、統監道と呼ばれ、現在も使われています。

伊藤が滄浪閣を本邸とした明治 30 年 (1897) に、大隈重信が陸奥宗光の隣の邸宅を別邸として購入しました。大隈は、翌年に内閣総理大臣となり、初の政党内閣を組織します。続いて、明治 32 年 (1899) には伊藤のもとに足繁く通っていた西園寺公望が、伊藤の勧めもあり、滄浪閣の西隣に別邸を構えました。

滄浪閣には日々多くの来客がありましたが、中でも大磯町に別荘を持っていた岩崎彌之助 (実業家) や加藤高明 (政治家) 等とは家族ぐるみの交流があったと言われています。

(2) 明治 (後期) ～大正～昭和 (中頃)

明治 30 年 (1897) に陸奥宗光が亡くなった後、別邸は次男 (潤吉) の養子先である古河家に引き継がれました。また、大隈重信の別邸は、明治 34 年 (1901) 年に潤吉の養父である古河市兵衛が購入しました。これにより、大隈別邸と陸奥別邸はともに古河家の別邸として利用されました。

伊藤博文の滄浪閣は、伊藤の没後 (明治 42 年 (1909)) も梅子夫人が住み続けていましたが、大正 10 年 (1921) に李王家に譲られ、別邸となります。

西園寺公望の隣荘は、大正 6 年 (1917) に西園寺が政界での活躍を期待していた池田成彬 (実業家・政治家) に譲渡されました。

明治後期から大正に入り、各邸宅は引き継がれましたが、大正 12 年 (1923) の関東大震災後、旧大隈別邸以外の邸宅は建て替えられました。

戦後、滄浪閣は、一時GHQに接收された後、李王家からの申入で^{ならはしわたる}檜橋渡 (当時の内閣法制局長官) が所有しました。檜橋と隣人の池田は親しく自宅を行き来する間柄で、同じ東海道沿いに住む吉田茂とも交流があり、吉田茂が相談のため、頻繁に池田邸を訪れたという記録もあります。

(3) 現代（昭和（後半）～平成）

戦後は4邸宅共に民間企業の所有となり、保養所や商業施設として利用されました。

現存する明治期の邸宅は、古河家に引き継がれた旧大隈別邸だけになります。

西園寺別邸跡・旧池田邸は昭和50年代以降には利用がされておらず、徐々に荒廃していますが、旧大隈別邸及び陸奥別邸跡に建てられた旧古河別邸は民間企業の迎賓施設として、今日まで良好な状態で保存されてきました。

一方、滄浪閣は、商業施設として増築・改修され駐車場が整備されるなど、他と比較して大きな改変がされました。伊藤が庭に建てた四賢堂（五賢堂）※は、吉田茂により昭和35年（1960）に吉田茂邸内へ遷座され、現在は七賢堂として旧吉田茂邸に建てられています。

※四賢堂は、没後に伊藤博文が祀られ、五賢堂になりました。その後、吉田茂が、昭和35年（1960）現在の場所（旧吉田茂邸）に移築し、昭和37年（1962）に西園寺公望を合祀、さらに、吉田の死後、佐藤栄作によって吉田の合祀が執り行われ、現在は七賢堂となっています。

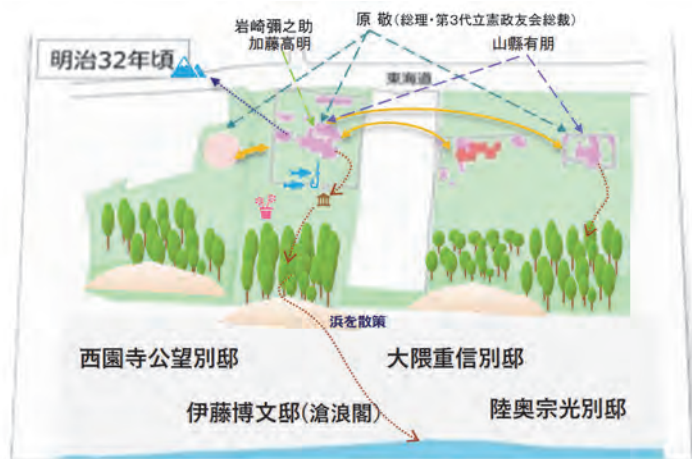


図 16 本邸園の変遷

表 1 邸園に積層する歴史

年代	旧滄浪閣（伊藤邸跡・旧李家別邸）	旧大隈別邸・旧古河別邸	陸奥別邸跡・旧古河別邸	西園寺別邸跡・旧池田邸
所有	使われ方	使われ方	使われ方	所有
建物	建物	建物	建物	建物
明治	● M29年 別荘を建築 ● M30年 本邸とする ● 黒塗り門、続き長屋、小門あり ● 伊藤博文 本邸 ・ 備かな休暇や病氣療養に一時的に英気を養う（読書、囲碁、名刀の手入れ等） ・ 四賢堂の円座に座って考え事をした ・ 散歩好きで松林を抜けて兵孫と庭池で釣りを楽しむ ・ 漁夫を邸前の松林に集め、酒盛り、歓談 ・ 公私の別なく訪問客と交流（即席や町の小学生等も） ・ 李垣（李家）との交流	● M30年 吉川邸を購入 ・ 松の苗木を大量に購入し、敷地に植樹 ・ 16畳の「富士の間」と10畳間をつなげてよく大宴会を開く ・ 市兵衛が購入後、毎夏、家族を連れて避暑した ・ 市兵衛の没後、洞吉（陸奥の次男）、虎之助、従純に引き継がれる ・ 海で泳いだ（虎之助）	● M27年 別荘を建築 ・ 寝室に好きな朝顔の鉢植を並べる ・ 病にて療養 ・ 山県有朋、伊藤博文、原敬、西園寺公望との交流 ・ 「養春録」を仕上げる ・ 松林の中で家人らと憩う ・ 市兵衛の没後、古河洞吉（陸奥の次男）が病氣療養のために使用 ・ 原敬との交流	・ 伊藤の誘いで隣地を買い「隣荘」と呼ばれた ・ 伊藤が晩酌にきた ・ 原敬ら立憲政友会創立につながる政治的人脈を築く ● M32年 垢抜けのした百姓家の風情の建物
大正	● M42年 四賢堂に伊藤を祀り、「五賢堂」とし、庭の隅に移動 ● T12年 関東大震災で倒壊 ● T15（S元年）旧材を利用し再建 設計者：中村與義平 施工者：多田工務店	● T12年 関東大震災で大破 ● T14年 原型の一部を残すように改築（元の建物は足尾銅山の柏木平へ移築） ● S21年 蔵を増築	・ 洞吉から虎之助、従純に引き継がれる ・ 避暑避暑の別荘として虎之助の母が使用 ・ 庭でバラの苗木を育て、それを本邸に運んだ ・ 「聴漁荘」と名付けられる ・ 土蔵をつくり、力士たちを呼び連れて来ては相撲を楽しんでいた（虎之助） ・ 戦後、虎之助夫人が居住	・ 西園寺から話を持ち掛けられ隣荘を譲受ける ・ 訪問客で門前市をなす ・ 吉田茂が政治の相談に訪問 ・ 散歩が趣味 ・ 小汀利得、榊山愛輔らとの交流 ・ A級戦犯で自宅軟禁。翌年（S21）解除 ・ 檜橋運との交流（蔵木戸から自由に入入り） ● S7年 新築 ・ 温室、朝餐室あり
昭和	GHQへ接収 ・ 李家からの申入れで購入 ・ 毎朝五賢堂で座禅を組んで無の境地に達んだ ・ 広い邸内の松林をそぞろ歩き、池田を訪問 ● S27年 増築 ● S35年 五賢堂が吉田茂邸内へ遷座 ・ レストランとして開業	・ 迎賓館「大磯荘」として民間企業利用	・ 迎賓館「大磯荘」として利用	・ 役員の厚生施設として使用 ● S50年代 利用実績なし ● H12年 管理人退去
平成	● H20年 大磯町指定有形文化財			

4. 明治期の景観・地形

現在、東海道（国道1号）沿いに残る松並木は、大磯の緑と歴史を象徴する代表的な景観となっており、主には江戸時代に街道沿いに植林されたのが始まりと言われています。

明治初期～中期に作成された測量図（迅速測図）によれば、邸宅が建てられる前の本邸園の区域には、東海道沿いに松林があり、林と浜辺との間は畑地として利用されていました。また、海沿いにこぶ状の砂丘が続いていることが分かります。（図25）

図25では、旧滄浪閣や西園寺別邸跡の建つ敷地の海側に松林がみられませんが、西園寺公望が隣荘を所有していた頃（1899～1917）には海沿いの高い砂山まで松林が続いていたとの記載が残っており、伊藤邸の庭園の写真から海側に松の高木林があったことが分かっています。

大隈重信が別邸所有後に松の苗木を大量に購入していたという資料もあることから、明治中期以降の別荘整備とともに防砂林としてつくられた松林でもあることが伺えます。



図17 明治以前の邸園区域の土地利用

資料：「迅速測図 神奈川県相模国海老原郡国府本郷村」（明治初～中期）. 国土地理院に、邸園区域を記載

5. 本邸園の現況植生

植生調査（2018年9月実施）による本邸園の現況植生は以下のとおりです。

- 本邸園の樹林地は、邸宅の管理状況により混み具合が異なるものの、クロマツを主体とした樹林の割合が多く、高木が散在し、実生由来のマツやスダジイ、クスノキ等の広葉樹がみられます。（①）
- 海側にある砂丘にはハマヒルガオやハマゴウ、ハマエンドウ等の砂丘特有の植物が生育しています。（②）
- 旧大隈別邸、陸奥別邸跡の敷地は、庭園として今日まで維持管理が継続されており、ツツジやウメ、サクラの他、果樹やバラが植栽されています。（③）
- 旧滄浪閣と西園寺別邸跡については、邸宅周辺で一部庭木として植栽された樹木は残存するものの、荒廃が進み、現存する庭園の形状が不明瞭となっています。（④）
- さらに、西園寺別邸跡では、樹林内にハリエンジュ等の外来種の侵入もみられます。（⑤）
- 旧大隈別邸、陸奥別邸跡の敷地にある海側の樹林は、マツやクスノキが優先する高木林であるものの、実生から生長した植物の繁茂が進み、やや薄暗い樹林空間へと遷移が進みつつあります。（⑥）
- その他の特別緑地保全地区では、樹高約3～5m程度の密度の高い松林が形成されています。（⑦）



①陸奥別邸跡前の松林



②旧滄浪閣敷地内のハマゴウ



③陸奥別邸跡横の果樹園



④西園寺別邸跡玄関周辺の庭園



⑤西園寺別邸跡の前庭



⑥常葉樹が繁茂する旧大隈別邸の樹林



⑦特別緑地保全地区の松林

写真 33 明治記念大磯邸園内の植物



※本図は、本邸園計画区域の樹林等の分布状況について、樹冠の広がり等の視点から優占する植生の分布を現地で確認し、整理したものです。

図 18 関連植生

参考文献

No. 資料名

1. 明治期の立憲政治の確立等に貢献した先人の業績等を次世代に遺す取組に関する検討会（2017.6）
「明治期の立憲政治の確立等に貢献した先人の業績等を次世代に遺す取組について（報告書）」
2. 大磯町教育委員会(1992.3)「大磯町文化財調査報告書 第37集 大磯のすまい(1)」
3. 大磯町郷土資料館(2009.10)「滄浪閣の時代：伊藤博文没後100年記念展」
4. 大磯町文化財専門委員会(2008)「大磯町指定有形文化財指定答申書」
5. 水沼淑子・学術講演梗概集(2012)「明治大正期における大磯町東小磯の別荘建築－別荘地化の様相と古河家・赤星家の別荘建築－」日本建築学会
6. 水沼淑子(2016.2)「日本建築学会計画系論文集第81巻第720号467-476『明治期家屋台帳による大磯の初期別荘建築の実態』」
7. 水沼淑子・学術講演梗概集(2015.9)「旧大隈重信大磯別荘の履歴」日本建築学会
8. 「早稲田大学大学史資料『大磯地所買入其他諸費踏査他関係書類(明治30年5月3日~明治34年5月16日)』」関東学院大学 水沼淑子教授提供
9. 国土交通省（2018）「明治記念大磯邸園明治150年記念公開 展示計画」
10. 株式会社プリンスホテル提供「関係工事、建築確認申請図面等」
11. 株式会社プリンスホテル提供「滄浪閣実測図（1958）」
12. 株式会社プリンスホテル提供「(仮)大磯滄浪閣チャペル増築工事図面（1992-1995）」
13. 古河電気工業株式会社「古河電工大磯荘リーフレット」
14. 三井住友銀行提供資料 2018年提供
15. 大磯町立図書館所蔵『土地台帳 相模国海老原郡大磯町』（明治23年1月1日起点）」
16. 大磯町立図書館所蔵（明治30年代初頭）「伊藤博文本邸「家屋図」、大隈重信邸「家屋図」、陸奥宗光別邸「家屋図」」
17. 大磯町郷土資料館所蔵「神奈川縣中郡大磯地番反別入地圖」
18. 大磯町郷土資料館所蔵「昭和8年旧営網図①（神奈川県）」
19. 大磯町郷土資料館所蔵「湘南地図社 大磯町明細地図（1966）」
20. 東京都立中央図書館所蔵「木子文庫（相州大磯町伯爵大隈重信別墅ノ図、相州大磯町古川市兵衛別荘、大磯滄浪閣御別邸改築平面図）」
21. 国土地理院（明治初期～中期）「迅速測図 神奈川県相模国海老原郡国府本郷村」
22. 国土地理院(1895)「測量図 大磯」
23. 伊藤之雄(2009.11)「伊藤博文：近代日本を創った男」講談社
24. 古谷久綱(1910)「藤公余影」東京民友社
25. 大橋又太郎(1899)「名流談海」博文館
26. 朝日新聞「1908年12月9日朝刊」（関東学院大学 水沼淑子教授提供）
27. 李方子（1978.10）「流れのまゝに：李方子自叙伝写真集」明恵会
28. 檜橋渡伝編集委員会(1982)「檜橋渡傳」檜橋渡伝出版会
29. 岡本厚(2018.3)「大隈重信自叙伝」岩波書店
30. 中野武(1985.6)「陸奥宗光」関西図書出版
31. 古河 潤吉 and 五日会(1926)「古河潤吉君傳」五日會
32. 原敬(1965)「原敬日記第1巻」福村出版
33. 岩井忠熊(2003.3)「西園寺公望最後の元老」岩波新書
34. 池田成彬伝記刊行会編(1962)「池田成彬伝」慶応通信
35. 池田成彬(1951.3)「私の人生観」文芸春秋新社
36. 中條建築事務所事務所編(1939)「曾禰達蔵・中條精一郎建築事務所作品集」中條建築事務所
37. 立命館歴史資料センター.<懐かしの立命館>西園寺公望公とその住まい前編>
<http://www.ritsumei.ac.jp/archives/column/article.html/> 閲覧日 2018.10.
38. 編著 鈴木博之.写真 和田久士（2007）「元勳・財閥の邸宅」JTBキャンブックス
39. 企画・編集 村松貞次郎.写真 増田彰久「日本の建築「明治・大正・昭和」」（1979～）三省堂